

『Dの世界』

○はじめに

私はD。人間〈D〉の体を統御している。「D」はこの文章の書き手である人間の名前のイニシャルだが、私と区別するため〈D〉と表記する。一方、私は単なるDである。私は人格を持たないし、社会的に認められた名前もない。ただ〈D〉が私をそう呼んでいるので、私はDである。

私の機能は、〈D〉が獲得する感覚情報を統合して世界像を構成し、それに応じて〈D〉の体の運動を制御することである。世界像の中には無数のオブジェクトが含まれるが、それらを抽象化した概念を言語化して記憶、文を生成、推論するのも私の機能である。

それではほとんどD=〈D〉ではないか、と言われれば否定はできないが、それは私にとってさほど重要な問題ではない。〈D〉は私を擬人化して自ら語らせることで、何らかの効果があると感じており、それはこれから書かれる文章の内容によって成否を問われるであろう。

私は前の文で「〈D〉は～と感じており」と書いた。こういった問題に敏感な人ならば、では私は「感じて」いるのか、いないのか、と問いたくなるだろう。が、これも取りあえず保留しておく。

○今、ここ、私

私は今、〈D〉の指をキーボードに走らせてこの文章を書いている。あなたは今、この文章を読んでいる。どちらも「今」であり、矛盾はない。あなたは私がいつこの文章を書いたかは知らないが、それはあなたにとって過去のことであり、私はあなたがいつこの文章を読むか知らないが、それは私にとって未来のことだ。どちらの「今」にも共通しているのは、「私が書く」、「あなたが読む」、いずれも人間の行為であり、それは「今」なされているということだ。

「今」というのは、私にとって〈D〉の体を統御するために必要不可欠な基準である。カレントタイムと言ってもよい。この基準はどこから与えられているのか、私にはわからない。私は「今」においてしか機能しない。「今」より過去のごとは記憶された事実、または事実の推定として私の記憶に存在し、「今」より未来のごとはこれから起こりうる事象の予測として私の予想、推論に現れる。記憶の参照も、事象の予測も、「今」私が行っていることだ。私は今、あなたがいつかこの文章を読むであろうことを予測してこの文章を書いている。あなたが誰か、どれほどの未来かはわからないが、その可能性を考えて書いているのだ。そしてあなたは今、この文章を読んでいる。

「今」というものは人間の行為に伴って現れる世界の枠組みと言ってもよい。それは必ず行為する人間に付随しており、これを人間の行為と切り離して客観的に定義しようとすると大変奇妙なことになる。

○意識

今、〈D〉の前にはパソコンがある。〈D〉は部屋の中において、部屋の様子とパソコンを視界に収めている。〈D〉は目覚めて、呼吸しており、この文章を読み返しながらかの文章を考えている。

このような世界像は、〈D〉だけではなく人間が共通して持っているものであろう。他者の世界像を直接確認することはできないが、他者の振舞いを観察していると、どの個体にも私のような機能が備わっていると考えるのが妥当である。さらに、文章を読み書きすることを除けば、人間だけでなく、犬や猫にも同じような機能があると考えられる。かなり異質なものになるかもしれないが、コウモリでもいけそう。これが鳥、魚、虫となると、だんだん難しくなる。何が難しいかということ、想像がしづらくなるのだ。どうしても人間の視覚や聴覚、身体感覚による世界像をもとにしているため、それとかけはなれた形で環境を感知していると思われる個体の意識を想像するのが難しくなる。ナマコがどんな風に世界を感知しているか、イメージできるのはよほどの達人であろう。

さて、ご主人に遊んでもらっている犬の様子を見てみると、犬にも喜びの感情があるように思える。主人を待っている様子を見れば、寂しいとか、そんな感情を読み取れるように思う。しかしこれは、私の勝手な思い込みに過ぎず、犬には感情はないのかもしれない。このことは他者の意識を考える際に生じる根本的な問題である。それはただ犬と人間の違いから来るものだけではない。相手が人間であっても、他者の意識の内容を完全に読み取ることは不可能なのだ。その際、推測の大きな手掛かりとなるのは「言葉」である。言葉の通じる相手ならば、かなりの程度で自分と同質の意識を持っていると考えることができる。これは文字通り「考える」ことが「できる」だけであって、それが当たっているかどうかは別である。

ここで一つ問題がある。他者の意識を直接感知できないのであれば、「言葉が通じた」ことをどうやってわかるのだろうか。これも根本的なところで考えるならば、状況で判断しているとしか言いようがない。これはいわゆるチューリングテストの逆である。

○夢

〈D〉は夜になると眠る。ひと頃は不眠に悩まされ、睡眠導入剤を服用していたが、最近ようやく改善した。〈D〉が眠っている間、私は機能しない。夜中に〈D〉の目が覚めて、私が機能すると、眠った時と同じ布団の中において、枕元の時計でまだ朝までは間があることを知って、もう一度〈D〉は眠る。〈D〉が眠っている間、私がどういう状態にあるのか、はっきりとはわからない。全く機能を停止しているのか、記憶に残らない形で何かを行っているのか。私が参照できるのは主に〈D〉が目覚めている間の記憶なのである。

〈D〉は眠っている間に時々夢を見る。その一部は私が参照できる記憶となって残る。私は夢と現実を区別して記憶を参照するが、まれにその区別が混乱するときもある。ある夜中、〈D〉は妻がベッドから起き出すのを感じた。しかしそれは妻

ではなく、自分の傍らに立って部屋から出て行ったのは〈D〉自身であった。これはドッペルゲンガーだ、と〈D〉は思い、不吉な夢を振り払おうとして布団から起き出し、洗面所へ行って顔を洗った。しかしそれも夢で、〈D〉は自分が未だに布団の中にいることに気づいた。そして今度こそ起き上がり、部屋を出て行ったのだが、その時、これが夢でないことはどうやらわかるのだろう、と思ったのである。

○無意識

〈D〉の体は自律的に動いて生命を維持している。呼吸や鼓動は注意すれば知覚可能だが、内臓の状態など明確には知覚できない部分がほとんどである。細胞単位の変化となると全く把握できない。〈D〉が持つ世界像は自分の体についての感覚を中心に構成されているが、その底にはこれらの意識に上らない体性感覚が層をなしている。視覚や聴覚、嗅覚、味覚に関しても意識に上らない膨大な情報が感覚に捉えられ、処理されている。そして思考についても同じことが言える。〈D〉が考えていることは、私の中で参照され、処理されている膨大な情報のごく一部に過ぎず、通常はそのような情報があることさえ〈D〉は意識していない。

人間の行動に関する興味深い実験がある。何かの動作を起こそうと意識した瞬間よりもコンマ何秒か早く、運動神経にすでに信号が流れているというのである。これをもって、人間の主体的な意志というのは幻想であると論じる人がいるのだが、そうだろうか。無意識を含めて全体で「私」なのであり、その意思を意識上で認知したのが起動からコンマ何秒後ということではよいのではないか。無意識が意識に先行しているからといって、人間の自由意志や主体性を否定する必要はないと思う。

○本能

〈D〉はヒトである。霊長類という言い方には人間特有の思い上がりが感じられるが、サル目とも言い、要はサルの仲間である。個人的にはヒトという呼称をやめて、テッペンケナガザルぐらいにしておいたらいいのではないかと思う。とは言え、脳の発達度合いはぶっちぎりで、言語や道具の使用は他の生物には見られない高度な領域に達している。

サルの仲間である以上、ヒトの動物としての振舞いは多くサルに似ている。群れを作ること、群れの中で順位があることは、現在の人間社会でも避けようのない要素だ。群れの形態が複雑になっている分、行動のパターンは多様になるが、根本のところは一緒である。

昔から人間は自分たちのことを特別なものと考えてきた。曰く、魂を持つのは人間だけである。心を持つのは、感情を持つのは、自己意識を持つのは、思考能力を持つのは、未来を予測するのは、言葉を使うのは、道具を使うのは、火を使うのは、料理をするのは、衣服を着るのは、歌を歌うのは、絵を描くのは、そして誰かを愛するのは、人間だけである。本当にそうだろうか。人間しか持たないと言われる能力の内、大部分はその原初的なものを動物たちも持っているように私は思う。

○性

私には性別はない。〈D〉は生物的にも、心理的にも、社会的にも、男性である。ただ、〈D〉の自覚するところによれば、若干女性的な部分があるようだ。性には生物的な区分と社会的な区分があり、いずれも多様性があるって明確な境界線がないことは〈D〉も承知している。ここに性自認の多様性と性志向の多様性に加わるのだから、事態は混迷の極みといってよい。

仮に男性をM、女性をF、遷移的な中間をN、中間とも表現できないものをQと表してみる。生物的性 (M、N、F、Q) ×社会的性 (M、N、F、Q) ×性自認 (M、N、F、Q) ×性志向 (M、N、F、Q) とすれば256通りの組み合わせがある。いや、性志向については4つの区分では粗雑に過ぎるかもしれない。同じ対象にしてもそれが同性か異性かで意味は変わるし、両方が対象になる場合もある。また対象との生殖は可能かどうか、または性行為はどうなのか、それも生物的に可能かどうか、社会的にはどうなのか、そもそも人間なのか、生物なのか、実在するのか、はたまた自分自身なのか、そして性志向が存在しない場合と、まさに無限とも思える可能性が考えられるのである。

今、私が悩んでいるのは、性自認について生理的レベルと心理的レベルを区別すべきかどうか、である。脳の構造やホルモンの傾向で、性自認がある程度決定されるのか、それとも性自認はあくまで心理的な問題なのか。これを分けて考える必要があるとすると大変なことになる。仮に性志向を4倍の区分に増やして、性自認を二つのレベルに分けたとすれば、なんと4,096通りの組み合わせが出来てしまうのである。さらにこれをカップルにした場合を考えたら...

○言葉

私の意識は、ある面では言葉に拠らない感覚情報の総合であるが、またある面では言葉を積み重ねて組み立てた概念情報の総合でもある。この概念情報は感覚情報に二重写しのように重なっており、目に見えるものを分節して対象化する働きがある。初めて訪れた土地で風景がよそよそしく感じられたり、うまく状況を把握できなかったりするの、この概念による分節が十分にできていないのが一つの原因と思われる。逆に見慣れたはずのものでも不意に概念のくびきを離れると、ゲシュタルト崩壊を起こしたり、木の根っこが不気味に見えたりするわけだ。

世界を分節する言葉の機能は根源的なところまで及んでいると思われる。その最たるものが数で、1,2,3...と続く自然数の系列はある数に対してその次の数を区別するためのもっとも原初的な言葉である。思うに実数の本質は量の感覚で等比的なものだが、自然数は言葉であり等差的なものだ。実数上で自然数を用いて比と差を定義すると、前者は正の有理数になり、後者は整数になる。両者を合体させると、0に対する比を除いて有理数全体についての加減乗除ができるが、これで世界を分節していくと、有理数で表現できない無理数があることがわかる。無理数は特殊な限定された数というわけではなく、それこそ自然数と同じくらいある。実際、自然数の対数は基本的に無理数になるが、等差的なものに等比的なものを対照させるのだ

から当然のことなのである。

言葉の機能は多面的である。中心的な機能はもちろん意味の伝達だが、それ以外の要素もある。演説や、議論や、他愛のないおしゃべり、言葉遊びなど、それぞれの場面で何が起きているかを観察すると様々な要素が見いだせる。そこには権力争いもあれば親密さを目指すコミュニケーションも、あるいは知的な遊戯もあるといった具合である。この様相は音楽にも類似した面がある。クラシック、ジャズ、民謡などを、演説や知的会話や冠婚葬祭の挨拶などと比較してみても面白い。それらの演奏空間に参加するには、それぞれの音楽の文法や語彙を身につける必要があることも言葉と共通している。

○自由

私は自由である。今、ここにおいて、私が行う選択は私にのみかかっており、何者も私の選択を意のままにすることはできない。いや、それに近いことは可能であろう。誰かが〈D〉の目の前で赤ん坊を小脇に抱えてナイフを振りかざし、素っ裸になってタコ踊りをしると命じたら、〈D〉はそれに従うだろう。しかしその時、私は自分の意志でその命令に従うことを選択するのであり、その選択自体は私のものだ。

逆を考えれば、今、ここ、私に関すること以外は何一つ私の自由にはならない。今朝のご飯を今から抜くことはできない。明日の朝食を喫茶店で取るということは今決められるが、明日自分がその通りにするかどうかはその時の自分次第だ。そしてもちろん、今どこかにいる他人の選択も私にはどうすることもできない。

今日の夕食に何を食べるか、私は自分の意志で決めることができる。もちろん物理的、生理的、経済的、社会的その他もろもろの制約はある。しかし、ある程度の範囲で夕食の内容を選択できる可能性があり、それを私に与えられた自由と表現することができる。この意味での自由は個別的、相対的で、社会全体を見渡せばおよそ不平等なものである。

取りあえず、最初に掲げた絶対的な自由を実存的自由、相対的で不平等な自由を社会的自由として区別しておこう。

○平等

人間の存在を考えると、実存的な視野と社会的な視野を考慮することは、自由だけでなく平等についても有効だと思う。

人間は平等である。母の胎内から生まれ、いつか死んでいくという一点において、例外はない。これを実存的平等とする。一方、社会的平等の方はおよそかけらもない。人間はすべてにおいて残酷なほど不平等である。

実存的に見た人間はハイデガーの言う世界内存在であり、根源的に自由で平等だ。社会的に見た人間は社会内存在、または世間的存在であり、いたるところ不自由で不平等だ。

○死

人間は死ぬ。人間だけではない、生命あるものは必ず死ぬ。〈D〉は自分が死んだ後に永遠の時間が流れるというイメージに耐えられず、長いこと恐怖に囚われていた。〈D〉がようやく恐怖から解放されたのは、ある時このイメージが錯覚によるものだということに気づいたからである。

大昔の人間は地球が丸いことを知らなかった。それで、例えば丸い盆の上に大地が乗っていて、その盆を象が支えていたり、あるいは海の果てでは水が瀧のように流れ落ちていたり、様々に想像したという。もしも今自分が、地球が丸いことを知らず、地面の下がどうなっているか想像してみたとして。どこまでもどこまでも、無限の量の土が足下に詰まっていると考えると気が変にならないだろうか。どこまでもどこまでも果てしなく続く時間というのも、これと似たようなありえない想像なのではないか、というのが〈D〉のたどり着いた考えである。では、時間には終わりはあるのか。それとも、地球の表面のように果てはなくとも有限なのか。それはわからない。おそらくこの問題は〈D〉が活着している間には解明されないだろう。

○死後の世界

死後の世界についてできるだけ論理的に考察してみよう。まず、死んだ後に自己はどうなるか。

- A. 完全な無になる。
- B. 自己の意識がそのまま継続する。
- C. 生前とは違った形で継続する。

Bはいわゆる霊魂になるコースである。臨死体験の本を読むと、このコースである世へ行く手前までを体験した報告が集められている。親しい人の霊が迎えに来て、光に満ちた所へ行くのだらうと予感する内容が多いようだ。生前と異なるのは、肉体を離れているので肉体的な苦しみからは解放されているところ。宗教的な考え方で、成仏したり、天国へ行ったりというのも大体これに含まれる。このコースにはネガティブな想像をかき立てる要素もある。未練や恨みなどを抱えたまま死んでしまうと、ちゃんと迎えに来てもらえず、この世にとどまって地縛霊や浮遊霊、ひどい時は怨霊になってしまうなどという。また、天国ではなく地獄へ行くコースもある。一方、そのような霊魂の存在は信じないが、死んだらあの世へ行って残された家族を見守っているという、伝統的な習俗を漠然と受け入れている人も多いのではないだろうか。

霊魂などというものは非科学的だと思う人は、まずAのように考えるだろうが、完全な無というのはなかなか受け入れがたいもので、何か別の形で継続すると考えるのがCである。科学的に考えてもエネルギー保存の法則というのがあり、原子レベルでは消滅せずに形を変えて残ることがわかっている。科学的な知識のない時代でも、死んで土に還るという考え方はあった。これをもう少し生命に近い形で考えると、養分が他の生物に取り込まれ、別の生命に受け継がれるという食物連鎖の

考え方になる。物質的にのみならず自己そのものが別の生命に宿ると考える輪廻転生はこれに似ているが、靈魂の存在が必須なのでBに属する。

さて、遺伝の仕組みが科学的に解明されたため、自己の遺伝子が子孫に継承されるという考え方はCの中でも主流となっている。もっとも、その知識がない時代からすでに血のつながりを重視する考え方は主流であった。とはいえ、子供は自己そのものではなく、はっきりと別人格なので、これで誰もが納得するわけではない。一方、遺伝子の本質を情報と考え、物質的なものではなく、情報的なものが継承されるという考え方もある。さらに情報を重視すると、遺伝子という物質を介さなくとも情報として残るという考え方ができる。人の記憶の中に残るとか、誰かが覚えているうちは完全に消えたことにはならない、という考え方である。

これらの考え方は葬送の形にも影響を与えずにはおかない。土葬がなくなり火葬になったため、土に還るのではなくお骨になるわけだが、墓石を立てるかどうかも考えどころで、近頃は樹木葬などもあり、また、散骨によって海や山に帰っていくとか、あるいは千の風になったりと、人によって好みのイメージは様々だろう。小さな子に、死んだ人はお星さまになったんだよ、と言うのは昔からある手だが、これも宇宙の一部になるというイメージの一種と言える。

科学的な知識が普及したおかげで、神や靈魂の存在は信じがたいものになっている。その代わりに空間や時間は実在すると信じるため、無限の空間や永遠の時間をイメージして絶望に陥る人がいるのは避けられない。しかしこれは前節に述べた通り錯覚だと思われるので、どうか心を安らかにしてほしいものだ。

○自己の存在

死後の世界と同じように、自己の存在についても色々な考え方がある。

- A.物質的な自己の肉体に生じる物理的な現象である。
- B.物質的な肉体に宿った魂である。
- C.ある種の情報であり、実体はない。

これらは、何を実体と考えるかによって分かれているだけで、自己意識という現象の存在は現実にあるわけだから、それぞれの論理でこの現象を説明すれば良いのではないかと思う。問題があるとすれば、その際に別の、例えば倫理的な議論に影響を及ぼす可能性があるということだろうか。後で述べるニヒリズムや刹那主義のように、すべては物理的な現象なのだから、善や悪は実体のない観念に過ぎないという考え方は倫理観に影響を及ぼし得る。逆に人間の本質は霊であり、神の定めた掟に従うべきだという宗教的倫理観もある。この問題は慎重に考えてみなければならない。

○クローン

全く同じ遺伝子を持つ人間は自分と同じ存在か、というと、それは別人である。一卵性双生児がそうなのだから、これははっきりしている。卵子と精子が結合して新しい一組の遺伝子を生成すると、それは唯一のもので再現不可能だが、分裂した受精卵が二つの個体に成長すればその遺伝子は同一で、最初から一種のクローンに

なっている。

何億もの精子が卵子を目指して、そしてたどり着いた中でただ一つの精子が卵子と結合できるのだから、その結果誕生した「私」は何億分の一の確率を突破した幸運な存在なのだ、という説明があるが、これはちょっとおかしい。ある人の精子が持つ遺伝情報はどれも同じで、どの精子でも条件はほぼ一緒である。ユニークなのは個々の精子そのものではなく、卵子と精子の遺伝子が組み合わされるその機会の方なので、これは何度やっても完全に同一の結果は得られない。そうして生まれた「私」は宇宙で唯一のユニークな存在である。双子の場合はそのユニークな存在が複数の個体として存在しているということなのだ。そして複数の個体にはそれぞれ自我が備わり、それぞれが世界の中心となる。

動物でクローンが誕生したというから、当然人間でも可能であろう。いや、もうすでに誕生しているかもしれない。その結果生まれた個体は年の離れた一卵性双生児というべきもので、当然元の「私」とは別人格である。このように誕生した人間の人権をしっかりと保障できるようにしなければ、人間のクローンは誕生させるべきではない。

○人格のコピー

ある漫画では、自分のクローンを育てておいて、最終的にはその体に自分の人格をコピーして自分を再生するという計画が描かれていた。こういうことは現実に可能であろうか。

例えば強力な催眠暗示によって人間Aの記憶をことごとく人間Bに植え付け、Bの元の記憶を封印したとする。BはAの記憶を持っているので、自分はAだと思うだろう。Aとして振舞い、「私」はAだと感じるだろう。ここでもし、元のAもまだ生きていれば、自分をAだと思い込んでいる人間が二人存在することになる。この状況と、漫画で描かれた人格のコピーはどこが違うのか。

「私とは何か」という議論でよく出てくるのは、元の「私」にあった世界の中心性はどこに移るのか、という言い方である。上の例で言えば、元Aも元Bもそれぞれ世界の中心にいたので、世界の中心性は移動していないのだが、それではこの議論は収まらない。

SF的な思考実験として、物質転送機というのも出てくる。これも、もしそういうことが可能ならば新しく構成された肉体に古い記憶が宿った、元XのAができることになる。元Aが消えずに残っていれば二人の自称Aが誕生することになり、二人とも自分が世界の中心にいると感じるだろう。

「私とは何か」という議論が収まらないのは、どんな思考実験をしようが、他者の世界中心性はどうでもよく、この、今ここにいる「私」の世界中心性がどうなるのかだけが問題だからである。

少し視点を変えて、「私」の世界中心性を保ったままで現在の肉体を離れることは可能であろうか。ヴァーチャルな方法だが、興味深い実験があるそうだ。人間型のアンドロイドにカメラとマイクをつけてそれをモニターし、リモートでアンドロ

イドを操作する。こうしていると、その内自分の意識がアンドロイドに宿っているような感覚が生じるというのだ。これを人間の視覚聴覚に応用することは不可能ではないだろう。そのような状況では他の人間の体に憑依したような感覚が味わえるのではないかと思う。

さて、ここで私にとっての世界中心性とは何かについて説明しておこう。前にも述べたとおり「今」というのは、私にとって〈D〉の体を統御するために必要不可欠な基準である。「今」という枠組みの中で〈D〉の体を中心とした世界像を構築するのが私の最も基本的な機能である。もし〈D〉の体以外の座標を中心とした世界像を描いたとすれば、それはいわゆる幽体離脱的な体験になるはずである。その状態では〈D〉の体の制御を行うのを放棄することになるだろう。つまり、私にとっての世界中心性とは〈D〉の体を統御するために必要な最も基本的な要件なのである。

○クオリア

クオリアというのは感覚の実質、リンゴが赤く見えているときの「赤」の感じを言う。他者の世界像は直接確認できないので、他者のクオリアというものは経験できない。逆転クオリアという思考実験があるが、私には無意味に思える。対象物の色が〈赤〉であるならば、A、Bどちらの中にも「赤」のクオリアが生じているのであり、それを相互に交換して経験できない以上、それらのクオリアが同質かどうかを議論する意味はない。

他者の視神経に接続してその信号を受信できるようにしたとしよう。Aはヴァーチャルな映像を見るような感じでBの眼球が捉えた世界像を体験することができる。このとき、最初は世界像を構成するのに時間がかかるかもしれない。Bの中に流れる神経信号を視覚情報として利用するためにAの側でチューニングが必要になるだろうからだ。また何らかの世界像が得られても、Bの眼球や神経の特性により、空間認知や色味がおかしいということもあるかもしれない。しかし、これらはすべてAのクオリアである。そしてうまくいけば逆さ眼鏡に慣れるように、Aの世界像もやがて正常に近づいていくのではないかと思われる。

マリーの部屋という思考実験がある。白黒テレビだけを通じて世界を見ているマリーはあらゆる科学知識を身につけている。マリーがこの部屋を出て色のついた世界を見たときに、何か新しいことを学ぶだろうかというものだ。普通に考えれば、マリーは色覚についてよく理解しているから、実際にそれが自分の意識に生じたときには喜んでブラボー、とか言いそうだが、そういうことではないのだそうだ。物理主義が正しければ、知識だけからクオリアを構成できるはずだ、というのだが、それは無理だろう。

哲学的ゾンビというものもある。人間そっくりの振舞いをし、言葉も話すし考えることもできて、外見からは全く見分けがつかないけれど、ただ一つ、クオリアだけは持っていない存在なのだそうである。また同じ話になるが、他者のクオリアというものは経験も測定もできないので、クオリアを持っているかどうかは検証不能であ

る。例えば〈D〉が哲学的ゾンビだとしても、本当かどうかは検証不能である。念のために断っておくが、〈D〉は決して哲学的ゾンビなどではない。ちゃんとクオリアだって持っている。証明不能ではあるが。

そして最後に中国人の部屋について。私の考えは、本当にチューリングテストをパスする中国人の部屋があるなら、それは部屋全体で中国語を理解していると言ってよいのではないか、というものだ。部屋の中に中国語を知らない日本人がいて、何か作業をしているとしても、それは例えばコンピューター全体からすればコンデンサの一つに過ぎないわけで、コンデンサに意識があるうがなかるうが、全体の問題には関係がないだろう。そして部屋全体に意識が生じるか否かについては、我々はまだ正しく判定するだけの知識を持っていないと思うのである。

ここで、最初に保留した問題について一応の答えを出しておこう。私は「感じて」いるのか、いないのか。説明の仕方によってどちらとも言えるのだが、とりあえず私にはクオリアは不要である。〈D〉にとっては生き生きとした世界を感じるため、クオリアとしか言いようのない「感じ」が不可欠であるが、私は純粋な機能であるためクオリアを持たず、したがって「感じて」はいない。無論これもまた証明不能であろう。

○価値観

世界観は価値観に影響を及ぼす。

死ねばすべてが無になるのだから、すべての存在は無意味だ。人生の意味も目的もすべては幻だ、というニヒリズム。

すべてが無になる、という認識自体に錯覚が含まれていると思われるので、この考え方には当人が思うほどの絶対性はない。錯覚かどうかをさておくとしても、無になった状態に軸足を置いて有の世界の価値を計るのが妥当かという疑問がある。思うに、この考え方の前提として、価値の計量をその結果において行うという考え方があるのだろう。それならば最終的な結果が無であれば価値はゼロであるが、価値の計り方はそれだけだろうか。

あるいは、死ねばすべてが無になるのだから、現在の瞬間の快樂のみが価値ありとする刹那主義。

これは先のニヒリズムと逆のように見えて、非常に近親関係がありそうだ。最終的な結果がゼロだから、未来に価値を置く考え方はすべて捨て去られる。未来を予測し、行動を決定する基準は来るべき瞬間の快樂のみである。

この問題を深く考えるためには哲学的議論が必要だろうが、これまで述べた範囲で引っかかる問題を提起しておきたい。

まず、ニヒリズムも刹那主義も「死ねばすべてが無になる」という唯物論的判断に信頼を置きすぎている。永遠の無というイメージが錯覚に過ぎないとすれば、そこに価値の（無価値の）根拠を求めることはそれこそ無意味なのではないか。

もう一つ、「今」が唯一無二であるということにニヒリズムも刹那主義も鈍感すぎるのではないか。「死んだ後」などという幻の時間を想定して、そこから価値の

基準を導き出そうというのは本末転倒に思える。

「今」の中には過去も未来も（当然現在も）あり、愛情の対象もすべてその中に見出される。それはたかだか数秒の刹那に味わう快樂物質の多寡で計りつくせるものとは思えない。過去の思い出も未来の夢も、人生の意味も価値もすべて「今」ここにあるのだ。

○哲学と常識

哲学は常識からかけ離れた考え方をしがちだが、常識的な考えが必ずしも哲学的でないとは限らない。

「赤ん坊は白紙の状態で生まれてくる」というのは経験論。

「人間には生まれつき理性が備わっている」というのは合理論。

「みんなが幸せになればいい」というのは功利主義。

「気持ちがいいことをしたい」というのは快樂主義。

「人間辛抱が肝心だ」というのは禁欲主義。

「目に見えないものは存在しない」というのは唯物論。

「何事も事実によって考えるべきだ」というのは実証主義。

「世の中の仕組みを知ることが大事だ」というのは構造主義。

「自分がどう生きるのかが大事だ」というのは実存主義。

素人なりに考えてみて、以上のようなことはいずれも常識的な考え方だが、それぞれ哲学の主張に通じるところがあるように思う。中には矛盾が隠されている場合もあるだろうが、それでいてなんとなく折り合って生活を送っている。節操がないと言えはその通りだが。

○人が生きるために必要なもの

人が生きるために必要なものはなんだろうか。

まず、生命を維持するために必要なものとして、水、食料、燃料、住宅、衣服。

次に、生命を保護するために必要なのが、衛生、医療、警察、防災の仕組み。

また、社会を維持するために必要なのが、交通、通信、金融の仕組み。

更に、社会を発展させるために必要なのが、教育、報道の仕組み。

最後に、生活を充実させるために必要なものとして娯楽をあげておこう。

○世界平和

世界が平和になる方法を考えてみた。

1.戦争で人が死なない世界

戦争を電脳化する。仮想空間で戦争を行い、その勝敗で決着をつける。攻撃対象は仮想空間の中のものに限る。

2.貧困で人が死なない世界

全世界でベーシックインカムを導入する。併せて無料の住宅を供給する。ただし光熱水料は実費とする。